

新型コロナウイルス感染症、 ワクチン接種について

新型コロナウイルス感染症に

対する取り組み

大阪中央病院 院長 根津 理一郎

令和2年に続いて、令和3年もまた新型コロナウイルス感染症対策と、いわゆる通常診療との並走に追われる1年となりました。

振り返れば令和元年（2019年）12月8日、中国の湖北省武漢で原因不明の肺炎発生が報告され、年明け令和2年（2020年）1月には16日にわが国、神奈川県で、19日には韓国で、21日には米国でそれぞれ1例目が発見されたことを受け、30日にはWHOが緊急事態を宣言し、同日わが国でも厚労省に感染対策本部が設置されました。1月20日横浜港を出発したクルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号でクラスター発生（2月1日に報告）、そして大阪都島のライブハウスでのクラスター発生の報道により、一気に病院に緊張が走りました。

治療法の確立されていない感染症2類に対して、当院においてはまずはクラスター発生予防が最優先事項となり、院内感染防止対策委員会が中心となって活動を開始しました。2月5日より業務用マスクを配給制とし、「3密を避ける」ことを院内に徹底周知しました。26日からは入院患者の面会制限、病院入り口にペダル式消毒用アルコールを設置、3月にはPPEの在庫管理・運用を開始、有症状外来の強化を図りました。

4月には世界での新型コロナウイルス肺炎による死者が10万人を超え、わが国においても感染拡大に歯止めがきかず、4月7日には緊急事態宣言が発出され（5月25日まで）、入院、外来患者数はともに激減しました。また健診部門にいたっては学会からの勧告もあり、完全業務休止を余儀なくされました。病院入口も東出入口（その後、正面玄関）と地下駐車場のみとし、それぞれに職員を交代制で配置して発熱の有無確認（9月よりサーモグラフィーカメラ導入）、手指消毒を行い、第5波が落ち着きをみせた翌年（令和3年）11月まで継続しました。

一方、診断面では6月から市販化された迅速抗原キットを用いて有症状者を対象に検査を開始しましたが、12月からは全て

の新規入院患者を対象としてPCR検査を開始しました。令和3年6月にはPCRセンターを開設し、昨年末までにPCR法にて1733件の測定を行いました(従前、NEAR法による拡酸検出2741件、およびイムノクロマト法による抗原検出179件)。

またワクチンについては、令和3年4月20日より当院職員を含む医療従事者を対象として接種を開始(8月に2回目終了・1207名・2414回)、9月からは職域接種を開始しました(468名・929回)。本年、令和4年にはオミクロン株感染拡大に伴い、1月14日から医療従事者3回目優先接種を開始したところです。

このように2年間の当院でのコロナ対応について振り返ってみますと、当初は予想できないことも多く、ワクチン、治療薬剤が利用できるようになるまでは「3密」回避・マスク着用遵守という公衆衛生的対処法に頼るしかありませんでした。まだまだ油断はできませんが、現在までクラスター予防が達成できている背景には、医療者、患者の「民度の高さ」によるもの大きいと感じます。とりわけ前者については、令和2年1月15日より毎週途切れることなく「Covid-19報告」を発信し、全職員への情報提供と協力を呼びかけてきた感染対策部委員会(委員長 関井副院長、事務局 坂東技師長)の役割は大きいと思います。

コロナ感染重症患者さんの治療に追われる高度機能病院の医療者の皆さま、初期治療、診断、往診に奔走されているかかりつけ医の皆さまと共に、私たちも微力ながらコロナ収束に向けて尽力したいと考えております。
本年も宜しくお願い申し上げます。